



シンプルだからこそ面白い！ 尺八

大阪音楽大学短期大学部 准教授

平山るみ (ひらやま るみ)



2006年、京都大学大学院教育学研究科博士課程認定退学。専門は教育心理学。著書は『ワードマップ 批判的思考』（分担執筆、新曜社）、『心のしくみを考える』（分担執筆、ナカニシヤ出版）など。上田流尺八道指南、泉山会所属。

ポスター発表のため長細い黒い筒型のケースを持っている方々を、学会会場に行くときたくさんお見掛けします。私は、同様のケースを、学会でないのに持ち歩いていることがよくあります。実は、ケースの中身は尺八です。

「どうして尺八を始めたの？」ときかれることが多いのですが、端的に申しますと、吹奏楽器をやってみたかったからです。大学に入学して、吹奏楽器をやりたいなと思っているときに目に入ったのが、「箏、三味線、尺八」という看板でした。あ、吹く楽器だと思って邦楽部を訪ね、まずは体験で初めて尺八を吹かせて頂いたところ、音が全く鳴りませんでした。そのまま1時間ぐらい吹かせて頂いたのですが、ほぼ鳴らず……これは鳴らしてみたい！と思って、すぐに入部してしまいました。

私の場合、なかなか鳴らない楽器だからこそ、自分の変化が見えやすく、動機づけが高まったようにも思います。全然音が鳴らなかったのが少しずつ鳴るようになり、いろんな音階を鳴らせるようになり、音色もだんだん変化したりと、行動（練習）と結果の結びつきを感じやすいのです。

尺八は、一般に、真竹という種類の竹で作られています。その内側の節を抜き、表面に指孔が4つ、裏面に1つの合計5孔の孔が開けられています。孔は5つしかないのですが、その孔の塞ぎ加減や吹き口の開口面積との組み合わせ

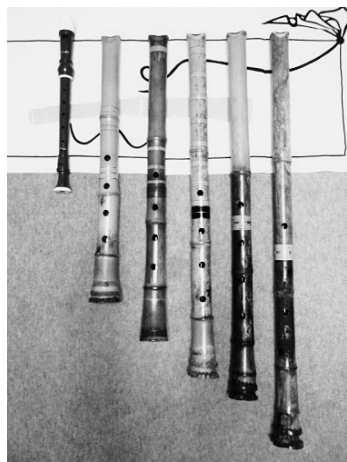
せで、ドレミファソラシド、そのシャープやフラット音はもちろん、あらゆる音階を出すことができます。「首振り3年」などと言ったりしますが、首の角度を変えることで開口面積を変化させ、音程を作っているわけです。息を吹き込む吹き口（歌口と呼びます）は、竹の片側を、外側に向けて斜めにカットした形で、ちょうどリコーダーのエッジの部分でスパッと切った形になります。そこに息を当てて音を出すエアリードのとてもシンプルな楽器です。このシンプルさ故に、最初はなかなか音を出すのが難しいのですが、その一方で、とても多彩な音を出すことができる楽器でもあるのです。

音を作るためには、息の速さや太さ、吹き込む角度、歌口と唇との距離、唇の形、口の中や喉の開き具合、楽器等の調整が必要となります。これらの組み合わせで、音色がさまざまに変化しますが、理想の音を出すためにはどうしたら良いかと、今でも試行錯誤しています。多彩な変化がありながらもなかなか理想に辿り着かないことも、飽きることなく続けて来られた理由の一つだと思います。

このように、一人でも十分に楽しむことのできる楽器ですが、楽器を通じて多くの方と出会えるのも魅力の一つです。尺八仲間はもちろん、お箏やお三味線、ギター、ディジュリドゥ等々、さまざまな楽器の方と合奏させて頂いたり、世代を超えて交流させて頂いてい

ます。最近では、ピアノと二胡と尺八というトリオで演奏させて頂く機会が多く、和洋中さまざまな楽曲にチャレンジしています。尺八をきっかけとして、いろいろな方にお会いして、いろいろなお話をお伺いできるのも楽しみの一つです。

私が教えて頂いていた尺八の先生は、尺八を生業にされていたのではなく別の職業を持たれていたのですが、このようなことを仰っていました。「芸は身を助けるというのは、金銭的ではなくて、精神的な意味で助けてくれるということだ。何かあったとき、芸が心の支えになってくれるから。」お話を伺った当初は、あまりピンと来なかったのですが、今は、その通りだなと思います（基本的には、日々穏やかに過ごしていますが）。これからも、心理学ライフはもちろんですが、尺八ライフも大切にしていきたいと思います。



1尺6寸から2尺3寸までの尺八（一番左はソプラノリコーダー）